

日本経済 本当は どうなのか

西山千明

The Japanese Economy

Chiaki Nishiyama

日本経済 本当は どうなのか

西山千明

The Japanese Economy

Chiaki Nishiyama

日本經濟・本当はどうなのか*目次

日本経済 本当は どうなのか

西山千明

The Japanese Economy

Chiaki Nishiyama

第一章 円高はこうなる

1 円高不況はこうなっていく 14

激烈な円高で直撃された製造業部門
非製造業部門の好況は長続きしない

2 円の適正な交換レートとは 20

米国にフロート制を堅持させよ
円安の基調的実勢は数年間は変わらない
これが円高のメカニズムだ

3 フロート制はこれからこうなる 28

先進諸国間の政策調整とは不可能な話
「競争通貨体制」へと進んでいく国際通貨体制

4 ドルは弱いのか強いのか 34

外国為替市場では依然として強いドル
空洞化していた米国経済は充実化され、活性化されていく

本章のまとめ 40

第二章

雇用はこうなる

① 失業問題はどうかになっていくか

42

失業率は着々と増加していく

法人税の大胆な大幅減税こそ雇用確保の道

② 「賃下げ時代」が到来する

48

増大していく「賃下げ圧力」

一時的な大幅賃下げが持続的賃上げや雇用増大のきっかけとなる

③ 定年や退職金・年金はどうかなる

54

至難となった定年延長や破産状況へ向かう恩返年金制度

高齢化社会での高齢者たちの生産性を向上させよ

④ 性別の雇用市場はこう変わる

60

女性への求人急増する

人々の企業間移動が増大し実力社会となっていく

本章のまとめ

66

第三章 物価はこうなる

① インフレは過去のこととなった 68

世界的な物価の下落や超安定の時代が始まった
今始まった「物価安定の時代・五十年間」

② 物価が下がると商売は繁盛しない 74

物価が下がれば不況スパイラル発生の危険性が高い
何とかしてゼロ%の物価上昇率を達成せよ

③ 株価や地価はこう動く 80

金利とは逆に動く株価や地価

製造業部門が不況化すれば株価や地価は崩壊する

④ 物価はこう動く 86

マネーサプライ残高伸び率を追え

さまざまな財やサービスの価格はこう動く

本章のまとめ 92

第四章 金融はこうなる

①「今や低金利時代」とは幻想にすぎない 94

重要なのは実質金利

「逆金利」とはあくまでもインフレ現象

②金融政策はこう変わる 100

金融の自由化は当初は金利を引き上げ、やがて金利を引き下げていく
情報提供こそ二十一世紀の金融機関の最も重要なサービス

③今こそ賢明な貯蓄をしなければ減びる 106

所得増大のため金利は賃上げに劣らず有効な手段
変動金利はトクかソンか

④投資はこれからこう動く 112

住宅建築投資は増大するが、オフィスビル建築投資は減退していく
外国への不動産投資が賢明

本章のまとめ 118

第五章 生活はこうなる

① 貧乏は今や昔話だけのことではなくなった 120

生産性が上昇し続けている限り生活は豊かになっていく
潜在成長力が激減している日本経済

② わが国の中産階級化は終わった 126

再び始まった所得階層分化の拡大
終身雇用慣行の終わりがもたらす生活の困難

③ 老後の生活はこうなる 132

不確実性ばかりが増大していく老後の生活
自衛化以外に道はない

④ 大きく時代逆行的な大都市圏化 138

人間的な街づくりの時代が始まる
「第二次産業革命」がもたらす「新しい地域の時代」

本章のまとめ 144

第六章 国際取引はこうなる

①「貿易の完全自由化」以外にわが国の将来はない¹⁴⁶

農業を中心としたわが国の飛躍的自由化はもう避けられない
「負の所得税制度」に活路を発見せよ

②「自主規制」を廃止しよう¹⁵²

「自主規制」とは「国際カルテル」結成のことだ

世界経済が高成長へ転じなければ「自主規制」の撤廃はきわめて困難

③国際的金融取引は自由化の一途をたどっていく¹⁵⁸

貿易の自由化よりはるかに急テンポで進む資本の自由化
拡充されていくあらゆる種類の金融商品

④海外直接投資は増大の一途をたどる¹⁶⁴

保護貿易主義と海外直接投資とは裏腹の関係

海外投資は各種のコストの格差を敏感に反映する

本章のまとめ¹⁷⁰

第七章 これからの産業構造はこうなる

① 日本経済の空洞化は避けられない¹⁷²

「新しい税制度」は空洞化を阻止できない

② 海外直接投資への趨勢は変わらない

② 「軽薄短小」型産業へと変容することはない¹⁷⁸

皮相な評論家の産業論はもうやめにしよう

大量生産方式の徹底なしに「多品種少量生産」は達成できない

③ 今こそ本格的な技術革新が始まった¹⁸⁴

技術革新はすべての産業分野に影響を及ぼす

今回の技術革新は「新しい高成長時代」をもたらす

④ 真のソフトウェアとは人間そのものことだ¹⁹⁰

「人的資本」の形成と拡充によって潜在成長力を画期的に引き上げよ

「人的資本形成論」「組織論」としてのソフトウェア

第八章 世界における日本経済はこうなる

① 日本の孤立化は深まっていく

日本経済の低すぎる貿易依存度

198

高付加価値生産以外に生きる道はない日本

② 経済援助より輸入の増大を

204

経済援助は決して本当の援助とはならない

諸国の発展こそ日本にとって朗報

③ 日本の国際化とは何か

210

日本の伝統的文化はホロニズムを否定する

世界の協調と発展に向けて

④ 二十一世紀は世界的高成長とともに始まる

216

「インフレなき持続的高成長」のための必要要因は出そろった

「第二の開国」によって繁栄が来る！

ワンシヨット・メモ索引

222

本文イラスト・山下正人

第一章 円高はマコトなる

(1) 円高不況はこうなっていく

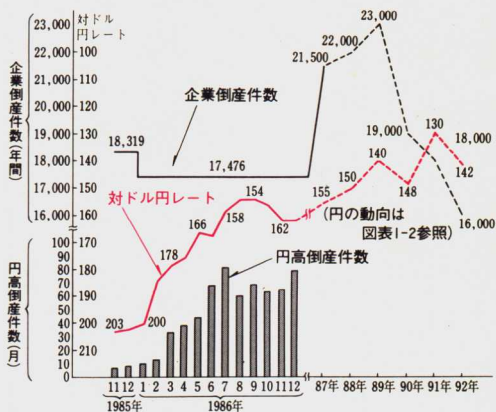
泥沼にはまりこむ円高不況

サービス部門にも不況がやってくる

1 激的な円高で直撃された製造業部門

昭和六十年秋からの一年間で約六〇%もという円高は、経済的合理性を完全に無視したものであり、激烈で急テンポにすぎた。その結果わが国の製造業は惨澹たる状況へと陥り、経常収益で見れば、六十一年四―六月期には、前年同期比で実に三二・五%もの減少を示した。これは、五十年七―九月期というあの深刻きわまりない反動不況以来の強烈な落ち込みであった。製造業が、このように強烈なノック・アウト・パンチと云っていいほどの被害をこうむったのは、輸出が、円建てで見た場合、六十一年度に量で五・二%の減少、輸出価格で一三%の引き下げをやむなくされたからである。

図表1-1 円レートと倒産件数の推移



資料 86年までは東京商工リサーチ「倒産月報」、以降は著者予測。
 (注) 負債総額1,000万円以上を倒産対象とする。



しかもこのような経常収益の減少は、あの円高作戦が始まってから、一年以上も連続してきており、この状況を抜本的に改善するには、少なくともここ数年を必要とする。

だが、今回の円高がわが国の製造業部門にもたらす最大の問題は、実は、企業の経常収益それ自体ではなく、働く人々の失業問題なのだ。それというのも企業は、後に述べるように、海外直接投資によって、企業自体の収益を維持していくことができる。だが、そのような海外直接投資は雇用の輸出を促進する。つまり、国内的には、解雇、それも大量な解雇を含んだ雇用の調整をもたらし、今後、わが国の失業率の着々とした増加は、大きな社会問題としても、今や避けることのできない状況となってしまう

ている。実際、わが国の完全失業者数は、昭和六十二年の初めになんと約一六〇万人を上回り、今後の三、四年の間にいわゆる「自然失業者数」は四〇〇万人近くにもなろうとしている。

2 非製造業部門の好況は長続きしない

ところが、そのような国内不景気の核心を物語る失業者の増大にもかかわらず、少なくとも六十一年の夏までは、円高不況を論じるよりは、円高好況を強調したり、少なくとも円高メリットによる景気の好転を強調した評論家が多かった。

その際の最大の根拠は、まず第一に、非製造業部門における大幅な経常収益の増大であった。実際、六十一年四―六月期には、この経常収益が実に三〇・二%もの大幅な増益を示した。このことが、円高による深刻な影響を軽視、または無視させることとなった。

また、第二には、消費が増大、とりわけ、建築着工戸数が高率で増加していたのも、その根拠であった。なるほど、これらの消費や、とりわけアパートを中心とした建築着工戸数や、そして非製造業全体の好況ぶりなどを見ると、わが国経済の景気は、円高によって、不況と呼ばれるほどの状況に陥っていないと言われるかもしれない。

しかし、製造業部門と非製造業部門との全体を合わせた全産業の経常収益は、たとえば非製